～Real nature of the paramnesia～

brades

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

～Ｒｅａｌ　ｎａｔｕｒｅ　ｏｆ　ｔｈｅ　ｐａｒａｍｎｅｓｉａ～

【Ｎコード】

Ｎ１４２０Ｕ

【作者名】

ｂｒａｄｅｓ

【あらすじ】

俺も、大学に入ってからすでに2か月が経つ。その思い出の中で、あるサークルの話になる。度重なるデジャヴに、俺は思う。～これは本当にあったものなのではないか～と。

（前書き）

今回のＳＳは、キリリクとしてお題を頂いた作品になります。

相変わらず駄文しか書けずに申し訳ない（，・ω・）

まるで真夏のような日差しが身体の水分を奪い、少々の気怠さを感じさせる。
今年も一週間続くような大規模な梅雨という梅雨はなく、たまに天気が崩れることはあっても、一時的にすぎなかった。

俺が大学に入ってもう2か月ちょいが経つ。
そこで感じたものは、まさしくデジャヴだった。
ん？俺の名か？ああ、遅れたな。俺は『音無結弦』。

大学内に一つ惹かれたサークルがあった。
別段、何をするのかもあやふやで、どうしても入りたいと心がときめいたわけでもない。
だが・・・その名を聞いた瞬間に、俺が大学に入って抱いていた既視感はまるで現実世界と融合するかのように一つになった・・・気がする。

サークル名を・・・ＳＳＳ。

何の略だろうと考えつつも活動場所へ向かった俺を待っていたのは、賑やかな連中の輝かんばかりの笑顔だった。
俺は高校時代のほとんどを鬱状態で過ごしていたから（とは言っても医者を目指すようになって少し変わったが）、ここにいた奴ら一人一人が楽しくやっている姿に、何かを投影していたんだと思う。

「あら？貴方新入部員の方かしら？」

奥に座っていた艶やかな女性が俺の存在に気付いたのか、こちらへやってきていた。

「あ、いや、まあ・・・」

心の中ではすぐにでも混ざりたい気持ちで一杯だったが、一応ここの活動内容がわからないんだ、すぐさま入って失敗するということだけは避けたい。

「・・・皆楽しそうでしょ？ここは別に活動方針なんて決まってない。ここにいるメンバーと駄弁ったり、皆で遊んだり・・・自由なのよ。」

「確かに楽しそうですね。・・・でも、そんなサークルってあっても良いんですかね？何か活動理念とかないんですか？」

「そんなにかたっ苦しくならなくてもいいわよ。あたしも一年だから。」

赤に近い桃色の髪に特徴的な碧のリボン。その姿を見るのも初めてではない気がしていた。

「理念ね・・・。あるとするならば一つだけ・・・。」

そう言ってその女性は一瞬口を噤んだ。

「実は・・・皆どこかで会ったことがあるような気がする、それだけよ。」

・・・思わず絶句した。

俺だけが感じていたと思っていたこの既視感、どうやらここのサークルのメンバー全員に共通してあるらしい。
偶然・・・にしては出来過ぎでいる気もするが・・・。

「俺もそんなことを思ってここに来たんだ。入っても・・・いいかな？」

「勿論。ここは楽しみを皆で共有する場所だからね。これからよろしくね♪」

その後、一人一人と少し話してみたんだが、やはり俺の記憶のどこかに彼らが存在しているようで、初めて会う、と確信できた奴は誰もいなかった。
その中で際立って覚えのある男がいた。青髪のそいつとは、少し話してすぐ仲良くなった。まるで今までの俺の生活が嘘だったかのように。

そして現在に至る。

「よう、日向。」

「おう、音無。どうだ、調子は。」

「何だか最近暑いからな。あんまりよくないな。」

「しっかりしろよ？お前がぶっ倒れでもしたら、お前の可愛い可愛い彼女さんが心配しちまうぜ？あの性格なんだ、お前がしっかりし

ねぇとな。」

「おいおい、またそのネタか？いい加減よせよ。少しはプライベートってもんを気遣ってくれ。」

「ははっ、それもそうだわな。」

彼女、なんて大そびれたものではないが、俺から声を掛けたのは確かだ。日向と初めて会ったときに匹敵するほどの、大きな既視感が来たからな。
それで俺にしては珍しく一目惚れしたらしく、そのまま付き合い始めたわけなんだが・・・。

「今日もこれから彼女さんに会いに行くんか？お幸せにな。」

ご覧の通りの弄られっぷりだ。
全く、少しはこっちの気も使えないのかね。

待ち合わせ場所に着いた。
一応１０分前なんだが、彼女はいつも俺より早く着いている。

「悪い。待ったか？」

「・・・ううん。平気。」

ニコッと優しい笑みを見せた彼女は、俺が急いで来た状況を悟ったのだろうか、おもむろにハンカチを取り出し、俺の汗を拭き始めていた。

「・・・大丈夫？あんまり無理しちゃ、だめよ？」

「ああ、大丈夫さ。最近のこの暑さの中走っちまったからな、それで疲れただけだよ。」

我ながら情けない話だな。

いそいそと汗を拭く彼女の手は、ひんやりしていて気持ちが良かった。

「もう大丈夫だ、そろそろ行こうか。」

「・・・わかった。」

道端とはいえ、公共の場だからな。そうは言っておいて、手を繋ごうとする俺も俺だが。

「なあ・・・奏。」

俺は何度となく呼んだ記憶のある彼女に、ある質問を投げかける。

「・・・？」

「俺は、こんな生活を覚えている気がする。奏やサークルの皆とわいわいやっていて、喜びも悲しみも分かち合っていた。・・・そんな気がよくするんだ。」

彼女はその話を聞きながら、いつもの優しい微笑みを俺に向けていた。

「・・・そう。」

一度一呼吸おいて、彼女はまた俺に喋りかける。

「・・・それが運命なのかしらね・・・？」

・・・その顔は、初夏の太陽の眩しさよりも、ずっと眩しく、綺麗だった。

～Ｆｉｎ～

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1420u/

～Real nature of the paramnesia～

2011年10月7日15時28分発行